

プロレタリア通信

第9号
88年1月15日
1部 100円

発行「プロレタリア通信」編集委員会
☆万国の労働者団結せよ!!
☆被抑圧民族の解放!!
☆帝国主義打倒・プロレタリア独裁・社会主義
☆スターリン主義打倒・国際非合法党の建設!!

第一回同盟総会の意義とは何か

A 第一回同盟総会にいたる経過

一九八五年まで、幾つかのサークルにまたがりながら連合赤軍にいたる日本階級闘争の未曾有の武装闘争とその敗北の内在的総括をそれぞれが続けて来た。

それぞれが自らの武装闘争を担いそして敗北した経験に踏まえ、連合赤軍の敗北とは何であったのか、しかも、その後の「内ゲバ三派」による三ヶタの人間の殺傷は一体何を意味しているのか。実にこのようなマルクス主義陣営における悲劇に対して決して傍観者でいられるはずもなく、なんとしてみればこれら悲劇を繰り返してはならず、再び団結して革命的に止揚することを決意して一九八六年同盟した。時あたかも連合赤軍事件と「内ゲバ三派」の悲劇に合わせて、第三世界の民主主義と民族解放闘争の高揚にもかかわらずヨーロッパ、北米、日本等々、帝国主義諸国におけるマルクス主義は後退に後退を重ねマルクス主義は古いと

か、もう労働者階級などなくなつたとか、そしていわゆる緑派・エコロジ派が圧倒的力を持つていた。このような困難な時代に、我々は頑固にも再団結した。我々は、自らの手足を縛るようなスローガンを旗標とすることなく極めてオーソドックスにマルクス主義それ自身の復権を掲げて再団結したのである。

一九八六年二月『プロレタリア

B この一ヶ年間の総括

わずか一年前の諸活動を十分総括しきれるはずもない。しかし、ひとつの区切りという意味で中間総括を試みるものである。

結論的に図式化すれば「意義と限界」「成果と不十分性」ということになるのであろうが、現在進行形であり組織とは生きているのであって、二者択一的総括は必ずしも妥当なものと言えないであろう。そこで、先ず経過を踏まえる

通信』はこうして発行された。

『プロ通』一号において綱領と戦略スローガンが掲げられ、機関紙発刊にあたっての基調は八章にわたって提起された。

第一回総会にいたる同盟は、行動綱領と規約の討論としてあり、党建設における指導組織づくりとしてあった。こうして、第一回同盟総会において「行動綱領と規約」は決定され、同盟活動の「公然化」は開始されたのである。

ことからはじめなければならない。

一、昨年十一月同盟第一回総会は「行動綱領と規約」を採択した。

そして『プロレタリア通信』五号（十二月）において「組織活動の再開宣言」をした。この「宣言」以降、一ヶ年の同盟活動が組織されてきたのである。『プロ通』五号の結語は次ぎのように述べている。

「我々は、今ようやく党建設における第一段階たる組織委員会を先取したばかりである。そして第一回総会を勝ち取ったのである。我々は、わが党建設の第一段階たる組織委員会の活動をレーニン的に言えば、上からの党建設として（誤解を恐れずに言えば官僚組織として）組織すると言ふことを全体で確認しなければならぬ。この活動こそが当面する第一級の我々の独自の活動の軸としなければならぬ。

我々の党建設の基軸は、あらゆる事態に用意ある党として建設しなければならぬ。まず、中央を建設せよである」

一、以上のように「宣言」して開始された政治組織活動は、三里塚、反天皇、沖縄諸戦線、労働者運動、被差別、民族解放諸戦線で一定の前進を勝ち取ることができた。しかしながらこれら諸課題の闘争の前進にもかかわらず、全体を有機的に結合することに必ずしも成功してこなかった。党建設の一環、政治組織路線としてまとめあげること成功してこなかった。ここに党中央建設という「宣言」を十分には実現していない。このことは『プロ通』の恒常的発行がなされなかった原因でもあると言ふことができるであろう。ではなに故に党中央を十分に建設できなかったのか。

このことを痛苦に総括しきらねばならない。第一にあげなければならぬのは、組織活動の再開を宣言したにもかかわらず『プロ通』を内部通信としなければならぬかつた力量の問題であり消極性にある。しかも、この消極性「慎重」さは、我々が再団結にいたるそれぞれの歴史性に拘束され遠慮し、それぞれが十二分に指導性を発揮しきれなかった。そこでは相互に説得しきる、変革しきるといふ強い意志とながなんでもプロレタリア前衛党をつくるのだという団結を勝ち取れていなかったことにある。このことは、政治組織路線として自覚されていなかったことをも意味するであろう。

第二に、ブントの分裂の歴史、この十数年間、個人として節をまげず共産主義者でありつづけた時代を反映していないとは言えないであろうか。ある種の守備範囲をそれぞれが多かれ少なかれ持っている。この守備範囲に干渉されたくない、組織に縛られたくない、という想いが無いとは言えないであろう。このような自立は市民社会の成熟を示しているが、そして、このような自立を我々は尊重しつつ同盟したのであった。だがしかし、この尊重は遠慮として作用しては来なかったか。我々は、何物かに期待し、何物かに不満を持つとき多かれ少なかれオノレ自身を中心に物を判断し考えている

場合が多々あることも考慮しなければならぬであろう。我々は、実証と科学を離れて、しかも行動の哲学を離れて人々、労働者人民の魂を揺さぶること、相手を説得し、説得されることはあり得ないであろう。我々は、革命理論を感じ性にまで高めることができればこゝんなに素晴らしいことはないと考えている。このことは、プロレタリア前衛党を自らつくり出すことであり、自ら造り出すとは自らを実践的に変革する日常である。我々はこういつた観点での一体間をつくり出し得なかつた。このことが一年間という時間の問題、「平和」で「豊かな」時代、ブント及び左翼の分裂の歴史ということができ。こうした時間、時代、歴史に対して自己揚棄すること、ここにこそ新たに団結した革命的意義がある。あらゆる負の遺産を自己揚棄し清算すること、ここに革命的前衛党は建設されるであろう。

第三に、この一年間独特の理論、我々の手によるマルクス主義の復権の事業、理論作業が日常の大衆闘争に追われ実現できなかった。このことは明確に自己批判しておきたい。

スターリン主義批判をまずもって構造改革批判として始めることを約束してきた。しかし、いまもって実現していない。組織活動の再開にもかかわらず、一九八六年三

月『戦後革命運動から何を学ぶか』以降、学習パンフレットを提起し得なかつたことを自己批判し一日も早くNo.2を発行できるようにしたい。

沖縄・琉球問題をひとつの契機として国内少数民族問題に一定の方向性を与えることができた。反天皇、沖縄闘争を通して、我々が依拠すべき人民階層とはどこか、誰かを。言い換えればプロレタリア

C 第二回同盟総会の意義

我々は、この一ヶ年間の不十分性を克服するとともに行動綱領と「宣言」、政治組織路線の実現に向けて前進するのになければならぬ。

この一年間の総括によって、我々は「なにをなすべきか」に一定の示唆をうけた。なにをしてはいけないか、なにをしなければならぬか、それは同盟としてもそうであり、それぞれの共産主義者にとっても一定の示唆となったはずである。ここに、第二回同盟総会の意

ア独裁の社会的基礎、社会変革・社会革命の戦略的階級としてどこを、誰を味方とするのかを明らかにできた。この一年間の理論作業は、こうした政治課題を突き出し得たとはいえ、より原則的な資本主義批判としてこの政治課題を位置付けなければならぬであろう。党中央の建設では、こういった理論問題で立ち遅れてきたことを素直に認めないわけにはゆかない。

我々は、この一ヶ年間の不十分性を克服するとともに行動綱領と「宣言」、政治組織路線の実現に向けて前進するのになければならぬ。

この一年間の総括によって、我々は「なにをなすべきか」に一定の示唆をうけた。なにをしてはいけないか、なにをしなければならぬか、それは同盟としてもそうであり、それぞれの共産主義者にとっても一定の示唆となったはずである。ここに、第二回同盟総会の意

一九八七年十一月

補
一、職業革命家と労働者革命家について (略)

なにがどのように議論されたか

A 革命的な政治について

第二回同盟総会において何がどのように議論されたか、ありてい

に素描しかつまとめて公表することによって討論をさらに組織する

ものである。

第二回同盟総会は、第一回総会と異なりザックバランな雰囲気のもとに進行した。

議題は、この一年間の経過報告、規約改正、理論学習会の組織化について、提案された。主に意見が集中し疑問が提起されたのは、経過報告に対してである。

1. 政治組織的獲得目標が明確ではなかつたのではないかと尋ねる疑問。なんのために大衆闘争を闘つたのか、たたかうことによつてどのように同盟は鍛えられたのか、結局何を蓄積したのか、こう言つたことが先ず意見として提起された。

この解答として政治路線、政治方針を確定すべきであるとされた。2. どのような党をつくりたいのか、党の頂点は何処なのか良くわからない。ここに組織獲得目標が設定できなかった原因があるのではないかと尋ねた疑問である。三里塚・沖縄闘争を中心として我々は闘ってきた。昨年の「6・

いうことに他ならないであろう。この点でこの一ヶ年間明確な目標のもとに全力投球できなかったという不十分性を我々は認めないわけにはゆかないであろう。しかしながら、この一ヶ年間我々は、それぞれが独自(国労運動、東チモール民族独立支援、東京天皇制を考へる会)にたたかいて一定の成果をあげてきたことを確認しなければならぬ。

問題は、党建設のイメージをはっきりさせるべきであり、本音で議論しなければならぬと言ふ提起である。

この点に関しては、本論文においてそのプロローグを提案しさらに議論を組織するものである。この議論は、我同盟(おのおの)の主体性と立場性を問う物となるものである。

3. 機関紙について
機関紙は、5号から8号までであり、都合4号で2ヶ月に一号を出す予定は大幅に遅れた。そして、『かける』を少し難しくしたようなもの、と言ふ意見まであった。

今後の問題として、同盟活動の内容、方針を随時紙面化することによって充実させること。そのためにも前記2点を早急に論文化することがまとめとされたのである。

以上3点はすべてが関連するものである。勿論、それぞれが独立したテーマであっても世界革命、



世界党建設と言う限りでは一体のものである。

我々は、同盟としての世界観、立場性、立脚点を断固として獲得しなければならぬ。とりわけ現在のには、その立場を明確にしなければならぬであらう。なぜなら、運動とは、一人の人間の立場によってさえ情勢をみる眼は全く異なるからである。立場（基準）をもたぬ社会科学などあり得ないのである。我々にとって共産主義（革命的、全人民的）政治とは、武装闘争から議会闘争までを意味する。とは言え、武装闘争は階級闘争を領導しきること大衆闘争を指導しきることを通して貫徹されるのである。より直線的には、人民の憎しみを正義に組み替えるところの闘いとして武装闘争はあるのである。

我々は同盟を創立したばかりである。我々は核分裂にいたる細胞建設にさえ十分ではない。だがしかし、我々こそ日本社会主義革命の唯一の前衛であると主観している。我々こそ真にマルクス・レーニン主義者の同盟であると主観的には自負するものである。そこで我々が提起する共産主義政治とは、レーニンの『なにをなすべきか』に匹敵する内容を意味するのである。

レーニンによれば、大衆の自然発生性と共産主義者の意識性、組合主義的政治と共産主義政治、経済

主義者の手工業性と革命家の組織、全国政治新聞の「計画」、以上である。

このプロログは『なにからはじめべきか』（組織論）と一体のものとして自覚的に把握されなければならぬ。「政治組織路線」と「政治路線・政治方針」とは、その概念上異なるものと考えている。政治組織路線とは文字どおり組織論としていっているものであって、プロレタリア的ヒューマニズム・人間論、階級的立場・立脚点を内容とするものである。かかる意味において政治組織路線とは唯物史観を基礎とするところの世界観なのである。我々は先ずもって、この世界観において統一されなければならぬ。なぜなら、共産主義者は、この市民社会において、あまりにも失うものが多いからである。失うものになり変わって共産主義者は優しさを倍加しなければならぬ。このことを古典的言いまわしで述べるなら自己犠牲性である。むしろ今日的には古典的に述べるより、闘志を内に秘めて、現実的におおらかに階級闘争を担うのでなければならぬであらう。そのようなものとして今日の「半合法」の時代を把握しなければならぬ。とはいえ、現場（沖繩の日の丸、君が代、国労の闘い、三里塚の闘い）ではギリギリの闘い、人生の岐路を問われる闘いが強制されている。あの2年前後する

闘争、さらにつくられた石油危機以降、たたかう人民にとってすべからぬギリギリの選択を迫られている。ここに、政治組織路線の重みがある。いかに、どのようにたたかうか、と言う戦術の前に、いかにどのように生きるかが問われているのが「半合法」の時代であり、国家権力にとって許されざる存在に限りなく近い「半合法」の時代である。ここに、8年や20年と根本的に異なる時代がある。

さて、政治とは、一言で表せば権力のことであり、力のことである。我々ほどのような権力をどのように打倒し、どのような権力を何処に樹立しようとしているのか、ということに他ならないであらう。このような内容においては、いわゆる新左翼と大きく懸け離れているものではない。まして、共産主義者同盟の第二次にわたる大衆的実力闘争、全人民闘争とあの20年代武装闘争のたまたかの歴史に多くを学ぶものである。このような内容は行動綱領に一般的には示されているところである。同盟第二回総会で議論されたのは、むしろ時代の鋭角的分析であり、具体的な帝国主義批判である。この分析が決定的に立ち遅れてきたことに対する批判（自己批判）であった。政治方針とはかかる分析による主体的運動論・階級闘争の理論である。ではなに故に情勢分析は立ち遅

れたのか、それは各自が「自由」に大衆闘争をたたかうためであった。大衆闘争を統合する、党派政治によってくるより、むしろそれぞれが現場に根をはることに重点を置いてきた。しかし、このことが改めて総括・批判の対象とされるところまでわが同盟の団結は発展したというべきである。つまり、統一的指導、統合する力が問われたのであり、新たな自覚が生れたのである。

獲得目標と言う観点から述べれば、我々の政治主張を諸闘争、諸運動のなかにもちこむことであり、人民大衆を動員することであり同盟を積極的に建設することである。

『プロ通』はこの一ヶ年間に都合四号である。しかし、三里塚では十号まで、反天皇・沖繩では毎月の学習会の組織化とパンフレットの出版、国労運動では『牽引』の定期発行など、こうした諸実践と成果は明確に確認されなければならぬ。問題はこの成果をより前進させるために革命的政治内容を提起することである。『プロ通』に表現することを通じて統一的指導・統合してゆくのでなければならぬ。われわれの党派性その立場性は、闘争の継承性でもある。われわれはこの一年間の成果をしっかりと踏まえ、それを発展的に継承するものである。そして同盟としては、とりわけ機関紙の独立採算に向けて一日も早く組織の分業

・工業化の実現に邁進するものである。

第二回同盟総会は、形式より一人ひとりの結社としての主体性を軸に一体感を獲得することに重点があった。闘争によって一体感をかちとるところまでいたっていない現状にあって、どうしても内的なもの、お互いに積極的なものを尊重し合うことを通じて信頼関係を築くこととしてきたのである。かかる意味においては第二回同盟総会は一定成功したということができる。

共産主義的政治について述べよう。我々は断固として新左翼を継承するものである。しかし、新左翼を我々の力で全く新たな階級闘争の地平に押し上げるのである。では新左翼とは何か？、学習パンフレット第一号『戦後革命運動から何を学ぶか』を参照せよ。また、第二回同盟総会にいたる一般経過報告、組織論ともいべき「政治組織路線」を一読すべし。

以上の諸文書において新左翼にとって共産主義的政治とは何か、われわれの立場性とは何かを明らかにしておいた。ここでは自己主張を中心に展開する。

我々は、暴力革命主義者として武装闘争から議会闘争まで組織する革命党建設をめざしている。

共産主義者組織委員会を指導部として当面全国一地方・地区に人

民組織委員会を組織するものである。人民組織委員会は、各種大衆闘争、諸運動の指導部を組織するものとする。勿論、労働組合運動、労働者運動、アイヌ、沖繩、琉球人運動や女性解放運動などは独立した組織委員会となるべきである。しかし今日的には同盟員の煩雑さを避けるために、国労、反天皇、沖繩、アイヌ、東チモール、三里塚、風営法反対など諸戦線のすべての大衆闘争指導部を人民組織委員会に組織するものである。

人民組織委員会は、地区、地方組織委員会のもと更に細胞を組織するものとする。そして当面独自の各種委員会を形成できるまでは、各級人民委員会のうちに労働者班（細胞）、反天皇、三里塚、文化諸戦線班、沖繩・琉球人運動（細胞）、女性解放グループなどとして同盟を建設するのである。このようにすることによって共産主義者それぞれの独立性、自主性と運動の発展、または我々の共産主義政治（獲得目標）を実現するものなのである。

共産主義政治については、しばしばレーニンの『なにをなすべきか』が引き合いに出されるのであるが、結局のところ共産主義的意識である。その政治表現こそ権力闘争であり、党派闘争であり、革命党建設なのだと言ふことにほか

ならない。これまでの新左翼の多くは、従って共産主義政治においてそもそも敗北して来たのである。単に権力闘争に敗北したのではなく、党建設において敗北したのである。このことの自覚なしには一歩も前進しないのだと言ふことを認識しなければならぬ。

ところで、われわれは、主流派の運動を展開しなければならぬ。主流派の運動とは、他とまじわらない運動、独自の主体性ある運動のことである。量を主張しているのではなく質を強調しているのである。独自の政治の展開である。だからと言って孤立した運動を主張しているのではない。他セクトとの共闘を拒否することでもない。

我々独自の政治主張、独自の組織と宣伝を主張しているのである。我々の獲得すべき内容を鮮明にしつつそのヘゲモニーの貫徹を主張している。我々自身が統一した行動をとる必要性を訴えているのである。我々は八六・八七年と全力をもって反天皇・沖繩闘争をたたかってきた。全同盟的には、反天皇・沖繩闘争を中心に三者共闘をつくりあげると共に在日沖繩人運動に参加し、現地では沖繩日雇労働組合を支援してきた。こうした関係をより緊密なものとしつつ、より大衆的な関係にすることで

ある。在日沖繩人運動に力を入れなければならぬであろう。こうした運動の成果を八八年は、より強

固な独自の隊列として打ち固めるのでなければならぬ。

我々は、労働者人民にとって必要とあらばあらゆる闘争を駆使するのである。地域闘争であろうと議会闘争であろうとである。しかし、そうした諸闘争は集中した力、統一した力によっても表現されなければならぬ。それが他ならぬ武装闘争である。諸闘争をお互いに共有すると共に最もその利害を代表した形態に於いて表現することも辞さないのである。

武装闘争とは何か、都市ゲリラであり、最も効果的な政治宣伝である。そして各種宣伝パンフやビラ、署名活動である。とりわけ機関紙誌による宣伝は重要な位置を占めるのである。労働組合などでは職場放棄やストライキなども要求貫徹の方法である。ところで武装闘争は、徹底した大衆闘争の利害を代表するようなものとしての宣伝でなければならぬであろう。

ブルジョア権力と資本に対する人民の憎しみを代表すると言ひ換えてもよい。人民が敵権力を実力によっても粉砕したいという感情にまで大衆闘争を推し進めることが一番大事なことである。そのことを通して、つまり階級闘争の高揚をもって武装闘争は組織されるのでなければならぬであろう。現在のには、我々は単に我々の力量

の問題としてではなく、主体的情勢をまだ切り開いていないということが出来るであろう。ただ我々は武装闘争によっても自国帝国主義を打倒し労働者階級による社会主義革命を実行してゆくのだと言ふことである。そのような革命党たらんとしているのである。

言い換えれば武装闘争のために諸闘争があるのではなく、大衆闘争が、武装闘争をも要求するようなものとしてたたかわれるかどうかにかかっているのである。

また、党主体との関係で述べるなら、武装闘争主体も反弾圧（法対、救済）闘争も全く等しいものである。同じ党主体としてあり、等しく党のための闘争なのである。あらゆる活動は党活動の一部、または党活動の全体を構成するものである。

革命的政治という点からも、党建設のあるべき姿という点からも武装闘争から議会闘争までをも頂点とする党建設をめざすものである。

武装闘争の第一歩は、あらゆる面から情報を収集するということ、とりわけ、運動の方面からは、国家官僚、資本家、金融資本、そして労働代官を孤立化させてゆくようにするわけだが、情報という面では、こう言った敵の情勢分析は欠くことのできないものである。人民の憎しみを組織することにおいては、寄せ場、三里塚や三宅島

の農民、逗子や反原発の市民、女性や障害者、そして組織、未組織のたたかう労働者運動を組織するのである。こういった敵の情報、味方からの情報の収集と集中、これらは絶対に欠かすことのできない条件である。また、議会でのいかなる権力の強化につながるような法律案、条例案にも反対するところの活動と人民の抵抗権の擁護のたたかい。

我々が目指す革命的政治と党建設は、したがって新左翼それ自身を乗り越えることである。

新左翼を全く新たな地平に引き上げるのである。新左翼の否定でも、新左翼の終焉を宣言することもできない。自分自身を乗り越え、引き上げる。

新左翼を全く新たな地平に引き上げるとは、同時に実践的に党的団結として国際会議を組織することでもなければならぬであろう。もとより運動として連帯することは重要である。しかし、そのような連帯運動は、キリスト教・解放の神学をはじめ、共産党、社会党や労働組合が先行的にすでに行なっている。我々は、これら先行的に行なわれている連帯運動に「革命的政治と党」を持ち込まなければならぬ。そして、独自に組織するのである。

革命的政治というのは、国家、資本、労働代官の悪業を暴露すること、国家や企業や地域にとらわ

れている人々の意識を変革すること、党のまわりの組織を党に結集することではないか。樹立する権力との関係で革命的政治を主張するならば、自ら権力たらしめる運動である。しかしそのような運動は実体にはなり得ない。理念化すれば評議会(少数派運動)運動、ソビエト運動、地域共同体運動などである。我々の理想は、やはりソビエト運動である。広く解釈すれば評議会運動である。だがしかし、そのような運動は、労働者と地域、

B、党の頂点とは何か

我々ほどのような党をめざしているのか。

世界革命の党であり、共産主義者の党である。

マルクス・レーニン主義の党である。

武装闘争から議会闘争までの党である。

職業革命家を中核とする党である。

中央集権主義の党である。

機関紙を中心とする党である。

自前主義・組織主義の党である。

以上が党の頂点であり組織のイメージするところである。

勿論、「行動綱領」、一般経過報告、そして本論文A章で述べたところの国際主義の党であり、労働者を中心とする被抑圧民族、被差別解放の党である。ここでは、

あらゆる階層の人民との連帯した反政府運動ということになるであろう。そのような運動にコミューン型とか、ソビエト型とか意味付与しても何ら積極的ではない、やはり、独自の組織、労研とか、社研とか、闘争委員会とか、考える会とかを持ち込むことを通して意識の系統性を組織するのである。つまり、立場性を組織するのである。

A章に直接つながるものとして論をすすめるものである。

昨年(八六年秋)「社会主義理論フォーラム」が東京で開催された。そしてマルクス主義への疑問が圧倒的多数派となった。これまでマルクス主義者(新旧の講座派

「日共脱党組」構革派)であった知識人によって、マルクス主義に対して誤りが指摘された。その一端をここに紹介しよう。

社会主義理論フォーラム一文、宗教、民族、天皇制分科会の報告が『社会運動』2号に掲載されている。

ここでとりあげるのは、我々と闘争の現場で常に一緒(反原発、労働組合、三里塚、アイヌ、在日など)である花崎平氏の論陣である。

花崎平は……身分制社会

から近代資本主義へと単線的進化論……ブルジョアジーとプロレタリアードへの、二大階級への純化という考え方・発展史観……民族独立・自決運動を階級闘争に従属させる理由づけになってきた

—今後の方針、単一民族の幻想・自己解体の契機は地域に——エコロジとは局地的な、ローカルな文化を含む有機的統一、地域をひとつのシステムとして考える考え方——

このような論陣は、各分科会においても多かれ少なかれ展開されたのである。

この十年間、大規模にマルクス主義は、かつてのマルクス主義者によつて疑問をもつて迎えられた。しかも多くの場合、自己のマルクス主義の解釈とその実践を内省したとは思えない仕方で否定されてきた。

では、マルクス・レーニン主義を標榜する党派はどうであったか。いわゆる「社会主義国」においては、生産手段の国有化と市場原理の導入、技術革新と生産力主義、心身にハンディキャップをもつ人々、少数民族問題など必ずしも社会主義的に解決されてこなかった。しかも、中央集権主義は単に官僚制を実現したにとどまった。ユーロコミニズムは、いわゆる自由主義陣営でありつづけ、世界の帝国主義者でありつづけてきた。日本の共産党も一國主義者としてありつ

づけてきた。しかも、ハンディキャップをもつ人々に対して福祉としてのみ考えている。このことは、内国植民地たる民族問題(アイヌ、沖縄)に対しても経済的援助、開発と位置付けられていることにも見られるとおりである。この点がスターリン主義として内容抜きに批判される点であるところの官僚主義である。

では、いわゆる新左翼はどうであったか。

一言でプロ独主義であった。勿論、我々はこれからもプロ独主義である。しかしながら、これまでのプロ独主義とは街頭主義であり蜂起主義者であり軍団主義であった。こうした隊列、軍団主義が機動隊との衝突を繰り返すなかで自然発生的に武装闘争に発展したのである。我々は、このことを必ずしも否定的に扱えていない。問題は、第一にマルクス主義を狭く狭く扱えていたこと、第二に闘争術を固定的に扱えていた誤りの反省である。

大槻節子、永田洋子、坂東国男の日記を一読して解るように、闘争術が組織戦術をなしていた。何を訴え、誰を仲間にするのか、ということ、精神主義、やるかやらないかがすべてをなしていた。しかも、今日の新左翼は、党派のための闘争、組織のための闘争となつて、かつての新左翼からさえ後退しているのである。つまり、

プロ独がすべてを解決すると言う考え方である。

マルクス主義とは、花崎平平のごとく単線的なものでも、新左翼のごとく一点突破主義でもない。

マルクス主義とは、社会科学の代名詞であるがごとく呼ばれるのは、単線的ではないからこそである。階級闘争一元論と言うのも誤りである。歴史学、政治学、経済学、哲学あらゆる学問において、マルクス主義的立場から考察することができる。この立場とは、唯物論の立場であり、弁証法的論理の立場である。この立場は、あらゆる人間の解放の立場なのである。マルクスにとつて人間解放の立場は、当時のヨーロッパを念頭においているのである。

我々にとつて問題なのは、プロ独になつたら人間解放をしてやるという思いあがりである。この主観主義を逆さにしなければならぬ。何かをしてあげるのではなく、人間はどう生きねばならないか、どう闘わねばならないかを訴えることである。支配されていること、抑圧されていることに不自由はないか、人間の尊厳は踏みにじられていないか。そして、権力、国家によつてつくられた差別意識・社会意識とたたかい、その根源、経済的解放に向かうことである。

世界革命とは、我々が生きてい

この時代、この社会、この国家のあらゆる既存の枠組みを取り外すことをもって始める。したがって、我々にとって世界同時革命とは、論理的にも時間的にも同時的なのであって、あえて説明する余地はないのである。要は、何をもって世界革命と言うかにかかっているのである。それは、世界共同体への入口としての世界革命なのである。日本革命は、日本における支配階級をさしあたって打倒したにすぎないのであって、そのことがただちに世界革命の突破口たり得るかどうかは、その時代の世界の人民にかかっている。そのことが情勢をなすのである。情勢を予言することより、フィリピンや韓国、南アフリカや中南米の闘いが今日の情勢を形作ってはいまいか。また、沖縄やアイヌ、被差別部落や障害者が日本の情勢を切り拓くうとしていないだろうか。あるいは三里塚の農民や良心的労働者もさかりである。

我々は資本主義の最高に発展したこの日本帝国主義にあつて、いわゆる公務員労働者と侵略企業・大企業の労働者に多くを期待することができ得るであろうか。こうした企業の労働者の良心に訴えるには、被害をこうむっているアジアの労働者や農民との連帯、被差別大衆との連帯によって、言い換えればこうゆう人々の多数派の政治によってプロ独を準備するのであ

る。プロ独になつたら解放するのはなく、それぞれが解放のためにたたかうのであり、その結果が自らプロ独を準備するのである。では一体前衛党とは何か。

第一に人間解放の理論を総合することである。理論を組織することである。すでに或る種の理論をもつてそれぞれが闘っている。特殊利害をいかに普遍的な理論、運動にできるかということが前衛党の存在である。諸個別闘争を全国的課題とし全国政治と有機的に結び付ける理論の組織化である。言い換えれば、自らの問題として、どれだけ把握しきれるかにある。もし前衛が存在しないとしたら特殊は特殊で、個別は個別で終わってしまうであろう。したがって、前衛とは、第一に哲学的存在・発見し統合する存在でなければならぬ。

第二に、前衛とは表現でなければならぬ。ここで言う表現とは実体であり、形式である。つまり、結社のこと、組織である。普遍的に理論を組織しそれを実現する手段、自らを技術たらしめること。すなわち主体である。前衛とは普遍的实现者主体である。技術のないところには発展はない。党も例外ではあり得ない。

党をつくるということとは、とても困難なことである。坂東国男によれば、自分の都合で組織をやめるといったことがかつての赤軍

派、ブントにはしばしばあったと述べられている。ここには、感情のおもむくままの個人主義（自由主義ではない）がある。ここには表現形式を持たぬ若さがある。ここには、方便として、「自由」を謳歌しているブントの姿がある。また、技術を手練手管と見下している。むしろ自らの思想を技術にまで高められるかどうかである。それが、党として、全国的に全世界的に高めることである。少なくとも、全国的に反天皇ネットワーク、国内被抑圧民族会議、被差別共闘、三里塚全国会議といった、こういった実体を表現することである。あるいはアジア・太平洋連帯会議とか世界の解放勢力との連帯を造り出してゆくのでなければならぬであろう。

第三に、戦術である。大衆闘争、全人民的政治闘争を結果することとは別個に党への結果集という戦術である。同時に党は、政治暴露の一貫として、プロパガンダとして独自の闘争を組織する。人民の革命権・抵抗権を代行するのではなく、もっとも効果的な政治の一形態として闘争を組織するのである。ここで言う戦術とは闘争のみではなく、組織戦術と一体でなければならぬ。

我々は、武装闘争から市民運動を含むあらゆる闘争（議会含）を闘うものである。新左翼からの一大

飛躍は、マルクス主義の深さであり広さでなければならぬ。さもないければ、新左翼でありつづけ、主観的存在であり続けねばならぬであろう。我々は断固として武装闘争を闘い、なおかつ市民運動・地域闘争をも担うのである。前衛党とはかかるものである。我々にはかかる党建設を断固として推進するであろう。そうした長期の大展望のもとに理論学習会を媒介としながら年数回の大衆的政治

治集会和独自の闘争を組織するものである。

一九八八年は、二十一世紀に向けて、なによりも新左翼の新たな地平を切り拓くために、その第一年にしなければならぬ。世界革命に向けた党の創生期を同盟一丸となって推進するでなければならぬであろう。

新年早々からの理論学習会と三月三里塚現地闘争に同盟挙げて取り組むのでなければならぬ。

ロケ・ロドリゲスさんにお会いして

T・S

東京では、「ロドリゲスさんと語る会」が、市ヶ谷駅すぐそばの日本YWCAで、12月8日の夜6時30分から9時までおこなわれました。12月8日は、日本軍がアメリカ軍をハワイで奇襲攻撃した開戦記念日であり、侵略された側の人を招いてお話をうかがうのほとても意味のあることだと思いました。

呉YWCAが制作したスライド上映のあと、ロドリゲスさんのお話を一時間以上わたって英語で井上礼子さんの通訳によってうかがいました。ロドリゲスさんは、長身の浅黒い気さくな人で、始めてお会いして握手したとき、「私は感情を大事にする人間だ。」という意味のことを聞いたとき、大変安心しました。私と同様な人間がいると思っただけです。

ロドリゲスさんは、お話の中で東チモールへの侵略の歴史（ポルトガル、日本、インドネシアの侵略）と、それに対する東チモールの人々の抵抗の歴史を情熱的に話され、「連帯という武器」を得るためにやってきたのだとしきりに強調されました。この「連帯」こそ、私が求めてきたものです。われわれは、この抑圧的な日本の社会の中で、個々バラバラに分断され、孤立しがちです。われわれにとっても必要なことは、「連帯」という武器によってインドネシアの東チモール侵略を背後で支え、甘い汁をすっている日本政府や日本資本をくつがえすことなのだと思えます。ともかく、東チモールの人民の息の長い抵抗闘争を支えるために、ロドリゲスさんの要請であるラジオ局建設資金カンパ運動をもりあげていかねばならないと思えます。